

20 世紀前半、福建省福州、興化地区から
東南アジアへの移民とその社会的背景
—キリスト教徒の活動に着目して—

**The Chinese Emigration from Fuzhou, Xinghua (Fujian Province)
to South East Asia and its Social Background in the Early
Twentieth Century: Focusing on Christian Activities.**

20 世紀上半叶、由福建省福州、興化地区到
東南アジアへの移民とその社会的背景
—着眼于キリスト教徒の活動—

山本真 (YAMAMOTO, Shin)
筑波大学(University of Tsukuba)

摘要：在本稿中，着眼于 20 世纪上半叶的福建省的政治情势、国际情势、社会、治安状况，来考察福建省基督教徒移民所产生的背景。这个时期，本来是外来宗教的基督教不仅进行福音传教，而且通过以教育和医疗为中心的各种各样的社会事业，渐渐地扩大其在福州与兴化地方社会的影响力。另一方面，在辛亥革命后的福建省，外省军队征用劳动力，土匪诱拐百姓，民生受到威胁。治安的恶化促进了前往东南亚的移民。但是为了对应这种事态，基督教为人们提供了避难的途径以及保护。接纳基督教与移民去东南亚，对福建民众来说，是面临清末到民国的严酷生存环境的有效生存战略。同时与海外联系的深化及人的移动，起到了给当地社会、文化引进新的要素的作用。

はじめに

近現代とは、人々による海外への渡航が頻繁化するとともに、海外からも人・物・金が流入することにより地域社会が世界と密接に結びついた時代と特徴づけられるだろう。本稿で考察対象とする中国東南部の福建省では、清末から民国にかけての時期に海外への移民や出稼ぎが盛んに行われ、1841～1949 年の出入国統計は約 187 万人の出超を示していた¹。華僑（海外出稼ぎ者及び移民）からの送金は膨大であり、またその資金を活用した諸事業の実施は僑郷（華僑の故郷）に大きな影響を与えたのである²。以上の認識を踏まえ、本稿では福建省の福州地区（旧福州府）³と興化地区（莆田県、仙游県）を主要な対象として、東南アジアへの移民状況とその社会的背景を考察したい。

ところで、1920 年代末に刊行された『福州僑務公報』は、福州地区を中心とする福建北部からの華僑の総数を 30 万人以上と見積もっている。同資料は、北ボルネオのサラワクに位置するシブ（Sibu：詩巫）に合計 10 万人余り、マレー半島のペラ（Perak：霹靂）州

¹福建省地方志編纂委員会編『福建省志 華僑志』福州、福建人民出版社、1992 年、19 頁。

²これについては陳達『南洋華僑与閩粵社会』商務印書館、1938 年が参考となる。

³清代福州府管轄下の閩県、侯県、長楽、福清、連江、羅源、古田、屏南、閩清、永福（永泰）の 10 県を指す。

のシティアワン (Sitiawan : 実兆遠) に 3 万人、シンガポールに 2 万人、ジョホールのバトウパハ及び永平 (Yong peng) に 5,000 人、マレー連合州及び非連合州に合わせて 1.3 万人、ジャワ、スラウェシ、スマトラに 3 万人、ミャンマーに 1.5 万人が、台湾に 7 万人、日本に 1 万人の華僑がいたと記述している⁴。

周知のように東南アジアでの華僑のなかでは、福州系や興化系は少数派に止まっていた⁵。これにも関わらず筆者がこれらの人々の動向に注目するのは次の理由による。すなわち 20 世紀初頭にキリスト教プロテスタントに属するアメリカのメソジスト監督教会(美以美会)⁶が深く関与して、福州地区及び興化地区から英国の保護国であったサラワク王国や英領マラヤへ向けての移民事業が展開された。福建で布教したプロテスタント各派のなかでも、強い勢力を誇ったのがメソジスト監督教会であった。大量に保存されている教会文書⁷には移民の過程及びその社会・経済的背景に関する資料も大量に含まれている。このように福州・興化地区からのキリスト教徒移民を考察対象とすることには資料上の大きな利点が存在する。またキリスト教の受容、それにともない発生した文化摩擦も中国近代史、さらにはアジア近代史上の重要なテーマである。それゆえ福州・興化からのキリスト教徒移民を研究対象とすることは、華僑(海外移民)とキリスト教の受容という中国近代史における二つの重要な事象を、相互連関的に考察する意義を有するのである。

なお、中国人キリスト教徒による東南アジア移民を扱った主な先行研究は以下のとおりである。福州からシブへのキリスト教徒移民について、移民先での定着状況を中心にしつつも包括的に研究した業績として朱峰(2009)が注目される⁸。またシブにおける福州系移民と興化系移民について、サラワク華人の視角により研究したものに黄孟礼(2005,2011,2012)が⁹、シティアワンでの華人社会の形成とキリスト教の関係を検討したものととして廖克民(2009)や銭進逸(2010)が挙げられる¹⁰。さらに広東からニュージ

⁴葉見元「改進閩北僑務趨議」『福州僑務公報』2、3 合期、1928 年。

⁵満鉄東亜経済調査局『英領馬來・緬甸及濠洲に於ける華僑』1941 年、67—70 頁。

⁶Methodist Episcopal Church North、中国名美以美会、後に衛理公会と改称した。同派は、18 世紀にイギリスのジョン・ウェスレーによって興されたプロテスタントの教派である。

⁷キリスト教宣教師が活動した地域ではその報告書や私信を地域史の資料として活用することも可能である。例えばメソジストの史料については、Missionary files: Methodist Episcopal Church missionary correspondence, 1846-1912, China, Japan, and Korea, Scholarly Resources Inc,1999. Missionary files Methodist Episcopal Church, 1912—1949 China, Japan and Korea, Scholarly Recourses Inc,2000.としてマイクロフィルム化されている。また档案の原件や英文版の年議会録については、Drew University The United Methodist Archives Centre , NJ,USA に保存されている。

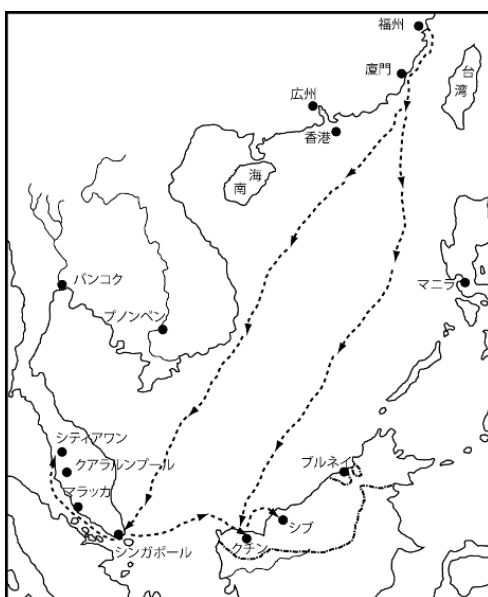
⁸朱峰『基督教与海外華人的文化適應—近代東南亞華人移民社区的個案研究』北京、中華書局、2009 年。

⁹黄孟礼『福州人拓荒路』シブ、詩巫福州公会、2005。黄孟礼『古田人南遷史』シブ、詩巫古田公会、2011 年。黄孟礼『詩巫興化人百年移民史』シブ興化莆仙游公会、2012 年。

¹⁰廖克民『“牧師樓”与社区領導：実兆遠華人衛理公会社区權力變遷的個案研究(1903—1940)』新加坡、三一神学院、2009 年。銭進逸『從山区到橡膠園：古田人移民拓土路』マ

ーランドへのキリスト教徒移民については土肥歩が考察を行っている¹¹。福州におけるプロテスタントの社会への浸透を、中国人信徒に着目し考察した Dunch¹² (2001) も本稿の趣旨と関連して重要な関連研究である。

これらの先行研究を参考としつつ、福建省からキリスト教徒移民が生み出された背景を、清末から民国時期にかけての中国国内の政治情勢、国際情勢、僑郷における社会・治安状況に着目しつつ具体的に考察することが本稿の中心的課題となる。使用する資料は、福建省における僑郷及び移民先双方でのフィールドワークによって収集した地方文献や聞き取り資料、さらにはキリスト教宣教師に関わる文書である。これに加えて、日本の台湾総督府や外務省、東亜同文書院¹³が作成した調査資料も活用したい。戦前の中国の社会経済に関する日本語資料については満鉄関係の調査が有名であるが、台湾総督府や外務省そして東亜同文書院による華南、南洋調査も利用価値の高い貴重な資料である。



地図 福州から移民経路 (黄孟礼 2005 掲載の地図を基に作成)。

I 福州地区におけるキリスト教布教の概況

福州におけるプロテスタント宣教師の活動は 1847 年に開始された。そして第二次アヘ

レーシアペラ、マンジュン古田会館、2010 年。

¹¹ 土肥歩「清末在外中国人と中国キリスト教布教事業—在ニュージーランド中国人と広州布教団を中心に」『東洋学報』94 卷 3 期、2012 年。同「「南洋」と「地域社会」をむすぶキリスト教」『歴史評論』765 号。

¹²Ryan Dunch, *Fuzhou Protestants and the making of a Modern China, 1857-1927*, New Haven : Yale University Press, 2001.

¹³東亜同文書院卒業年次生による中国国内の調査旅行については『東亜同文書院中国調査旅行報告書』、『東亜同文書院大旅行誌』として現在マイクロフィルム化されている。
http://www.yushodo.co.jp/micro/archives2012/arch12_1_075.pdf

ン戦争後の1858年の天津条約、1860年の北京条約を経て、内陸部での布教が認められた。その際、教会は福音宣教の一環として教育や医療事業にも力を入れた。福州では高等教育機関として福建協和大学(各国ミッション合同)、華南女子文理学院(メソジスト監督教会)が、中等教育機関として鶴齡英華書院(メソジスト監督教会)、榕城格致書院(アメリカンボード)、三一学校(英国聖公会)などが設立されていった。こうした背景の下、1919年までのプロテスタントの受餐信徒数において、福建省は全国3位の38,000人(1位は広東の6万人、2位は山東の4万人)となった¹⁴。なお省の全人口数に照らした場合、信徒の絶対数は決して多いとは言えないものの、信徒は全省に均等に分布していたのではなく、沿岸部や閩江沿岸部に集中していた。つまりキリスト教の影響力はこれらの地域にあっては内陸部よりも相対的に強いものであったとみなせよう。

先行研究において清代末期から1920年代の福州地区におけるプロテスタントの浸透状況を多角的に検討したのはDunchである。彼は同時期に基督教青年会(YMCA)の勢力拡大に注目している。福州地区基督教青年会は1907年成立したが、その後会員は急速に増加し、1911年の春までには350人となった。青年会の会員は必ずしも教会の信徒とは限らなかったが、その役員には影響力のあるプロテスタント教会の信徒を含み、そのうち3人は清末から民国初期の福建省における政治エリートであった。すなわち黄乃裳(挙人、諮議局議員、福建省政務院郵政部長)、陳之麟(英華書院卒、諮議局副議長、福建省政務院財政部)、陳能光(橋南公益社社員、福建省政務院外事部長)、李長民(清末の秀才、早稲田大学に留学、福建省諮議局書記長、1913年には衆議院議員に当選)などである。そして1921年には会員は約2,400人にまで増加していた¹⁵。

ところで、20世紀初頭、福建に関心を寄せる日本の軍部、台湾総督府や外務省もキリスト教勢力の拡大に相当の注意を払っていた。ここでは日本海軍の囑託として情報工作に従事した宗方小太郎が辛亥革命直後の1912年に作成した報告を引用する。

各省と同じく福建に於ける基督教伝道も亦甚だ旺んにして、山嶺水涯、到处教会堂を設けざるなく、基督の福音を伝へし以来四十余年(天主教を除く)、宣教の任に当たるもの親しく其地に住み、親しく其地の人民に接し、風俗人情を始め経済的事情を知り、人民を誘招する方法に苦心せる結果、如何に少しく見るも多少の勢力扶植となり居れるは疑ふべからず(中略)斯る勢を以て教勢扶植に従事しつゝある宣教師の事業中、福州に於ける米派の英華書院、厦門に於ける同文書院、英華学堂の過去、現在の活動は確に勢力ある一誘招機関たるを失わず。現在福建都督府内重要な位置を占め居れる黄乃裳、陳能光等の如き、皆米派学堂の出身ならざるなく、決して見遁すべからざる趨勢と云うはざるべからず(仮名遣いは原資料のまま)¹⁶。

¹⁴ 中華続行委員会調査特委会編『中国基督教調査資料』(原『中華帰主』1922年の修訂版)上巻、中国社会科学出版社、2007年、728頁。

¹⁵ Ryan Dunch *Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China, 1857-1927*, New Haven: Yale University Press. 2001. Chapter 3 and 5.

¹⁶ 「福建都督府内の概況 明治45年4月15日」(神谷正男編『続 宗方小太郎文書—近代中国秘録—』原書房、1977年、226頁。

その他、日本の外務省が 1917 年に編纂した『福建事情』は「英国は勢力扶植の手段として主として病院経営に重きを注ぎ米国は学校経営に重きを置き着々成功してその勢力至大なるものあるを知る可し」と記述している¹⁷。これに加えて台湾総督府民政部警察本署による報告書も「学校病院経営ノ如キモ学科ヲ完全ニシ設備ヲ新ニシ監督ヲ嚴ニシ其形式内容共支那政府設立ノ学校ヲ凌駕スルノ觀アリ」と分析した¹⁸。民国初期、福建省においてキリスト教会は一定の勢力を扶植しているのみならず、着々と影響力を拡大しつつあると日本政府系の機関は観察していたのである。

II キリスト教会とシブ、シティアワンへの移民

(1) 中国人信徒黄乃裳とキリスト教徒移民

福州地区からの移民送出において重要な役割を果たしたのは閩清県出身の中国人信徒黄乃裳(1849-1924)であった。閩清県の坂東鎮湖頭(湖峰)にあって黄姓は有力宗族であったが、黄乃裳の父は大工兼農民であり、家庭は決して裕福ではなかった。幼くして叔父に就き手習いを始め、8歳で私塾に入学した。1866年には坂東鎮に布教に訪れたメソジスト監督教会のアメリカ人宣教師 Nathan Sites 等の影響により、洗礼を受けることになった。入信に際しては地域社会との間に摩擦が発生したが、黄は信仰を深めていった。その後、黄はメソジスト監督教会において伝道業務や教会発行の新聞編纂に従事する一方、中国の伝統的学問の習得にも努め、1894年には科挙の郷試に合格し、举人となった。また日清戦争の講和条件に反対する1895年の「公車上書」に参加、1898年には北京に赴き康有為、梁啓超ら改革派要人と交際した。戊戌の政変により改革派が弾圧を受けると、娘婿がシンガポールの華人指導者林文慶であったことから、同地に逃れ、華字新聞の主筆に就任し、さらにサラワクでの開拓事業を志すことになった¹⁹。

その結果、黄乃裳は英国の保護国であったサラワク王国の第二代ラジャ(国王)であるチャールズ・ブルック(Chares Brooke)²⁰と開墾の協定を結ぶことに成功した。さらに自身の故郷である閩清県だけでなく、メソジスト監督教会の有力信徒である陳長恵²¹の協力を得ることができた古田県などの福州府下の諸県において移民を募集し、合計 1,000 人

¹⁷外務省編纂局編『福建事情』1917年、414頁、東洋文庫蔵。

¹⁸台湾総督府民政部警察本署『福建省に於ける外国人の公益的施設』作成年不明、頁数記載なし。東洋文庫蔵。

¹⁹黄乃裳「絨丞七十自叙」(詩巫福州公会編『詩巫福州墾場 50周年記念刊』1951年所収)、97頁。また黄乃裳の伝記全般については、劉子政『黄乃裳与新福州』シンガポール、南洋学会、1979年。詹冠群『黄乃裳伝』福州、福建人民出版社、1992年が詳しい。

²⁰チャールズ・ブルックは英国の保護国であるサラワクの第二代国王である。英国人のジェームズ・ブルックは地方勢力の反乱勢力の鎮圧に協力し、ブルネイのスルタンからサラワクのラジャ(藩王)に任命された。サラワクは1846年にブルネイから独立、1888年に英国の保護国となり、第二次大戦での日本の占領を経て、1946年に英国の直轄植民地となった。その後1963年にマレーシアに参加しその一州となり現在に至っている。

²¹林頭芳編『福州美以美年会史』福州、美華書局、1936年、143頁。

以上の志願者を集めることに成功した。移民の3分の2はキリスト教徒であったという。しかし開墾農場の維持・経営は困難を極め、3年後の1904年に黄は経営から手を引かざるを得なくなり、事業の責任者はメソジスト監督教会より派遣された宣教師J.M.フーバー(Hoover1872-1935)に引き継がれた。アメリカ人であるフーバー牧師は、英国人であるチャールズ・ブルックから強い信頼を獲得することができた。その後ゴムの栽培に成功したことにより、開墾農場の経営は軌道に乗り、シブには福州や興化から続々と新規の移民が入植し、「新福州」と呼ばれるに至った。そして今日では人口のうち60%以上が福州系を中心とする華人により占められる独特の社会が形成されたのである²²。また、彼らを送り出した閩清県や古田県も多く、華僑を生んだ僑郷とみなされるようになったが、そのきっかけはキリスト教徒による移民事業であった。

なお、サラワクの開墾に対する華人の役割は、第二次大戦前に作成された日本政府拓務省の調査資料でも注目されていたので、以下に紹介する。

即ち当国(砂拉越)輸出入貿易の大部分は支那人の掌中にあるのみならず、金、胡椒、サゴ粉等重要商品の生産、製造に独占従事してゐる。また護謨事業を始め殆ど凡ゆる職業に従事し、当領経済界を完全に掌握「リード」してゐる。彼等は如何なる職業にも従ふと同時に我々の思ひもよらぬ奥地でも孜孜として活動してゐる。尚当国の労働者として最も数がまとまり、且つよく働くものは支那人である。

支那人は斯く多数居住し而も少なからざる勢力を有するのみならず、数多の学校を有し、教育を享けるもの多く、当国住民中最も進歩して居る。政府の中、下級官吏となつて居る者も少なくない(仮名遣いは原資料のまま)²³。

このように拓務省の調査は華人の勤勉さとサラワク経済への影響力を高く評価していた。

(2) 移民事業における中国人信徒や牧師の功績

シブへの移民の成功には、メソジスト監督教会が有した海外とのつながりや外国人宣教師の尽力が重要であったことは間違いがない。しかし黄乃裳やフーバー牧師の下にあって実務面において事業に貢献した中国人牧師や信徒の活躍も看過できないだろう。ここではこうした人々に注目したい。キリスト教徒として黄乃裳に追随し、シブへ移民した劉家洙(1878~1954、閩清県三溪郷出身)は、経済的成功後、故郷から同族をシブに呼び寄せただけでなく、坂東鎮に設立された文泉中学(後の閩清第二中学)に多大な援助を提供した。

劉家洙の故郷である閩清県三溪郷は黄乃裳の故郷坂東郷の東隣に位置する。その父は4畝(1畝は6.667アール)の土地を所有する農民であった。14歳でキリスト教に入信し、

²²シブの華人人口については山下清美『東南アジア華人社会と中国僑郷—華人・チャイナタウンの人文地理学的考察—』古今書院、2002年、68頁を参照のこと。ただしこれは1970年の統計に依拠した数字である。なおシブ市のオフィシャルサイト<http://www.sibu.gov.my/>は現在シブ市の総人口を22万人としている(2010年9月4日閲覧)。

²³拓務省拓務局『サラワック王国事情』1938年、40-41頁、東京大学東洋文化研究所蔵。

教会が設立した学校で学ぶことを望んだが、従兄弟の妨害に遭い初志を貫徹できず、やむなく閩江上流での木材労働に従事したという。1901年に黄乃裳がサラワクへの移民を募集していることを聞き、これに参加した。シブでは開墾に従事する傍ら、原住民(イバン族)との交易を通じ資金を蓄積し、ついに400エーカーのゴム園主となった。1904年に黄乃裳が帰国し、フーバー牧師が開墾場の責任者となると、その下で華人の指導者としての活躍を開始した。一方で、1912年には「華源号」という商店を設立、雑貨販売、地元製品の輸出、中国への送金業務をてがけることになった。1914年に故郷から親族100人余りを呼び寄せたことをきっかけとして、その後劉一族は続々とシブへ移民した。1925年にはサラワク政府から第3省第8区の区長という官職を授けられ、名実ともにシブ華僑の中心的指導者となった。日中戦争においては華僑籌賑祖国難民委員会を組織したが、そのために日本軍の占領下で一時拘禁された。教育方面にあつては1916年に中華小学校の設立に尽力し、さらにシブの中正中学・小学校や士来小学校の理事長を務め、故郷閩清県では文泉中学、天儒中学、毓貞女校を援助した。キリスト教信仰においては富恩堂教会を創建し、日々規律正しい生活を送り、毎週日曜日には欠かさず礼拝に参加したという²⁴。劉家洙はキリスト教徒としての生活規範を身につけた人物であった。

その他、中国人牧師として移民事業に協力し、その後福州やシンガポールにおいて牧師として活躍した人物に陳観斗(古田県人 1882-1964)が挙げられる。陳観斗は前述の古田県平湖鎮の有力信徒陳長恵の息子であり、幼少に家塾で学んだ後に、11歳で古田培元書院(メソジスト監督教会による創立、後に超古中学となる)に入学、福州の英華書院へ進学後、移民事業に協力し、労働者とともにシブへ渡航した。健康を害して帰国した後、1902年から古田県で伝道に従事、1904年に福州英華書院を卒業した。その後華南女子文理学院教授、福建協和大学教授を歴任、1922年にはメソジスト監督教会と密接な関係をもつシカゴのノースウエスタン大学へ留学、24年に修士の学位を取得した後に福州へ戻った。しかし、1926年に反キリスト教運動が激化するなかで、何者かによる襲撃を受けた。このためであろうか1927年夏に華南女子文理学院から休暇をとり、シティアワン宣道堂の牧師に就任、1931年にはシンガポール福霊堂の主任牧師に転じた。太平洋戦争中の日本占領時期にも福霊堂の牧師としてシンガポールに留まった。1946年に中国に帰国したものの、1948年にはシンガポールに戻り、三一神学院の教授に就任した²⁵。このようにシブへの移民事業の成功の背景には中国人の信徒や牧師の尽力があったことが注目される。

なお、外国人宣教師のなかで僑郷の社会事業や移民の送り出しに積極的であった人物としては興化で活躍した米国籍のウィリアム・ブルースター(William Brewster、1862-1916)を忘れることはできない。メソジスト監督教会の興化への布教は1863年に開始されたが、1890年に興化に着任したブルースター牧師は社会事業の遂行に強い使命感を抱いていた²⁶。新聞『奮興報』、哲理小・中学校、孤児院、興仁医院、美興印書局などの教育・

²⁴『僑長劉家洙公紀念集』1990年(私家版:出版地シブ、シブにて収集)。

²⁵陳観斗『観斗年譜・家族簡史』(私家版:シンガポール)1964年。シンガポールにおいて陳観斗氏の親族から複写を許可された。

²⁶これについては William N. Brewster *The Evolution of New China*, Cincinnati, New York, Jennings and Graham; Eaton and Mains, 1907, pp. 288-294.

医療に尽力した。さらに織布工場、製麵工場、汽船などの実業の方面からも地域振興に情熱を注いだ。そして黄乃裳の開墾事業を伝聞したブルースター牧師は、自らシブへ視察に赴き、興化からの移民促進を決心した²⁷。そして1912年から13年にかけて141人がシブに移住し、興化芭（地名）の開墾に従事したのである。しかし実際に移民とともに渡航し現地で開墾を指導したのは、莆田においてメソジスト監督教会が設立した哲理中学を卒業した中国人牧師の陳秉忠であった²⁸。興化からの移民はブルースター牧師により提唱されたものの、実務においてはやはり中国人牧師の協力が不可欠であった。

ところで、日本の調査資料には興化のキリスト教勢力についても記述がある。上海にあった東亜同文書院の学生は卒業旅行として中国各地を旅行した。彼らはブルースター牧師を訪問し次の記録を残している。

外国宣教師を訪ふ、米国人名をブルースターと云ひ年五十前後元気頗る盛んなり、かゝる僻陬の地にありて種々計画する所大なるには一同の感心せる所。即ち一廣大なる敷地を占領し構内教会堂あり中学校あり女学校あり稍離れて工業学校あり室内数台の印刷機械を据付け多数の生徒をして之れが活版業を習はしむ、遙かに孤兒院あり運動場あり其外彼等の住宅に至るまで誠に盛んなるものなりき、外人これが総て十八名、以て彼等の布教に熱心なる実に驚くに堪へたり、彼此地に居ること已に廿五年、土語の甘きこと土人の等しく驚く所と、附近の信者すべて五六百名と、斯くては麗しき耶蘇天国を建設すること又易易たらんか（仮名遣いは原資料のまま）²⁹。

東亜同文書院の学生はブルースター牧師の努力を単純に宗教的情熱として理解したようである。これに対して、廈門の日本領事館員による報告は「探聞スル処ニ拠レバ同人ハ興化ニ居住スルコト三十年ノ久敷ニ及ビ教民約二万人ヲ有シ同地方ニ於イテ大勢力ヲ擁スル」³⁰と、アメリカ系の教会による事業の展開に対して強い警戒感を露わにしていた。これは1898年にフィリピンを植民地化し、1911年の福州における辛亥革命にも関与した³¹アメリカによる勢力扶植を恐れてのことと思われる。

(3) 西マレーシアのシティアワンへの移民

福州地区の人々は、サラワクのシブ以外に、西マレーシアのペラ州マンジュン郡のシティアワンにも多く移民した。現在マンジュンの人口約20万人のうち、その半数を華人が占め、さらに華人のなかでは福州地区に属する古田県出身者が2万人と最大数を占めると

²⁷陳日新『福建興化美以美會蒲公魯士伝』美興印書局、1925。張福基編『興化衛理公会史』福建興化衛理公会、1947年、78-98頁。

²⁸前掲、黄孟礼（2012年）、210-211頁。

²⁹東亜同文書院第十期生『楽此行』大正2年（1912年）、238頁、東洋文庫蔵。

³⁰「興化ノ領事館管轄区域変更稟請之件」1915年4月（『廈門領事館報告書』日本国外務省外交史料館蔵、6-1-6-30）。

³¹菅野正『清末日中関係史の研究』東京、汲古書院、2002年、第4章「福建辛亥革命と日本」。

いう³²。シブにおいてサラワク政府は農業振興のために開墾移民を招聘したが、これとほぼ同時期に、英領マレーのペラ（Perak）政府も食糧不足を解決するための措置を模索していた。マレー連合州政府華人事務官の G.T.Hare³³は、1903 年に中国からの農業移民の導入を建議し、メソジスト監督教会を通じて労働者の募集を試みた³⁴。ではなぜ植民地政府はメソジスト監督教会を通じて福州から移民を導入したのだろうか。先行研究において廖克民は、シブへの移民が参考とされており、商人気質の閩南（福建南部）系より福建北部の稲作農民が移民として適当と判断されたこと、さらに信頼できる仲介者が必要とされたことなどを理由として指摘している³⁵。なお教会は移民の募集だけでなく、開墾地における社会建設にも中心的な役割を果たした。教会が社会事業を積極的に推進した。その姿勢は 19 世紀後半から 20 世紀前半に提唱された社会福音の思想と関連していよう³⁶。

こうした歴史的背景の下、1903 年にシンガポールのメソジスト監督教会マライ年会はドイツ籍の H.L.E Luering 牧師と福州府閩侯籍の林称美牧師とを派遣し閩侯県、古田県、福清県において開墾移民の募集を行った。ただし移民事業の将来についての不安は拭い去れなかったであろう。当初 1,000 人を目標としたにも関わらず、実際には移民志願者は 484 人しか集まらなかった。そうしたなか、林称美牧師は故郷で移民を募り自らの一族の人々を移民団に加えた。たとえ教会が斡旋する事業であってもリスクをとまなう開墾移民の参加には血縁や地縁という伝統的紐帯が重要な意味をもったといえる³⁷。マレーシアにおける閩侯盤嶺籍林氏の族譜である『天定州砂拉越閩榕盤嶺西河林氏族譜』（1974 年編）によれば、林称美牧師は当初科挙の生員の試験を目指していたが、これに失敗し牧師になったという。さらに林姓の族譜を読むと、一族からは福州の英華書院などで教育を受けた人材を輩出したことが理解できる。林氏一族にとって教会学校は社会上昇の大きな梃子となったと見なせよう³⁸。

³²ペラ州マンジュン古田会館弁事処での聴き取り、2010 年 11 月 22 日。

³³G.T.Hare の事跡について満鉄東亜経済調査局は「彼は四州の支那人所有の鉱山、農園及び村落を巡歴調査し、華僑社会に均しく大勢力を扶植し、華僑対策上貢献する所多く」と高い評価を与えている（満鉄東亜経済調査局『英領馬來・緬甸及濠洲に於ける華僑』満鉄東亜経済調査局 1941 年、103～104 頁）。

³⁴前掲、錢進逸（2010 年）、78 頁。

³⁵前掲、廖克民（2009 年）、21 頁。

³⁶これについては Xing, Jung, *Baptized in the Fire of Revolution: The American Social Gospel and the YMCA in China, 1919-1937*, Bethlehem : Lehigh University Press, 1996. 第 1 章を参照されたい。

³⁷錢進逸編『実兆遠福州墾場百周年記念文集 1903-2003』マレーシアペラ、曼絨華人基督教文化協会、2003 年、35～37 頁。

³⁸教育事業は社会的上昇を図る人々を教会に引き寄せる上で重要な役割を果たしていた（信徒の学生には学費の減免があった）。このことは福建省古田県を舞台とした林耀華の社会人類学的作品『金翼』においても描写されている。主人公である黄東林の三男（三哥）はメソジスト監督教会が福州で経営した英華書院で学んだ際、洗礼を受け、このことを父東林へ報告した。その手紙には「たとえどうであろうと、影響力をもつ外国人やキリスト

さて、旅の途中で逃亡者が出たため人数を減少させたものの、1903年9月に最初の移民363人がシティアワンに到着し、甘文閣（Kampung Koh）地区に定住した。この際、2,500 エーカーの土地が、5年間免税という条件で、移民の本籍（古田籍、閩侯籍、福清籍）に依拠して彼らに分配された³⁹。入植者のなかに多くのキリスト教徒が含まれたため、移民社会は教会を中心として発展していった。ペラ政府との開墾契約にも開墾の請負人（すなわちメソジスト監督教会）が移民と政府との間を繋ぐ媒介者としての事務を行うこと、ペラ政府駐在官（Resident）が必要に応じて Headman（頭人）を任命して彼に地域での紛糾の調停を任せること、などの規定が盛り込まれていた。教会は中国人牧師と西洋人の宣教師の協力の下で運営されたが、政府と華人社会を媒介する Headman の役割は事実上中国人牧師が担ったのである⁴⁰。その後、教会が1906年に Sitiawan Mission Plantation Limited を設立、1910年からはゴム栽培を導入したことにより開墾区経済は安定した⁴¹。

経済的安定にともない血縁や地縁を頼っての後続移民が流入したが⁴²、開墾移民の派閥（県レベルでの同郷意識）には強固なものがあつた⁴³。同じ福州地区出身であっても県ごとに方言に違いがあることが同郷意識の背景として重要と思われる。その一方で、中国同盟会の影響を受けた益智書報社や中華革命党シティアワン支部、そして益群社などの国民党系の団体も組織されていった⁴⁴。益群社は他の団体と合併し、1935年には全華人を包摂する中華総公会に発展するなど⁴⁵、全華人を包摂する団体としての組織化も徐々に進展していったのである。

III 移民の社会的背景

（1）キリスト教徒と地域社会

以下では移民発生の社会的背景について、サラワクへと多くの移民を輩出した福州地区古田県の社会状況を検討する。

教徒と関係をもつ手段なのです」との説明が付されていた。三哥はその後、やはりメソジスト監督教会が福州に設立した華南文理学院を卒業し、かつ父が牧師である女性と結婚した。三哥は協和大学に入学した後、メソジスト監督教会からアメリカに派遣されたが、林耀華はこの留学を「彼の成功はその家族と全黄姓宗族に荣誉をもたらした」と総括している。林耀華『金翼 中国家族制度的社会学研究』北京、三聯書店、1989年重印（原著は英文、1944年ニューヨークで出版）、第5章及び第11章。

³⁹前掲、廖克民（2009年）、26—29頁。

⁴⁰前掲、錢進逸（2010年）、59頁。

⁴¹施敦祥『実兆遠的福州人 従歴史角度探討』マレーシア・ペラ州、マンジュン古田会館、2003年、128—137頁。陳利良主編『承伝福州精神：福州人墾植実兆遠 100周年紀念』マンジュン古田会館、2003年、22頁。

⁴²Coole, Douglas P. “Methodism in Sitiawan” *The Malaysia Message* Vol.38, No3., 1928, P.10.

⁴³Minute of the Twenty-second Session of the Malaysia Conference 1914, p.41.

⁴⁴実兆遠各社団学校追悼殉難僑領陳方江潘丁五位先生大会輯『哀思録』1946年、8頁。

⁴⁵『曼絨中華公会会史与会務発展』、発行年不明、頁数記載なし。シティアワンで収集。

内陸部に位置する古田県では閩江の港町である水口鎮が河川交通の中継点として重要な市鎮であった⁴⁶。しかし清末の『古田県郷土志略』に「本境の地は瘠せ、産物は多くなく、産品も亦精妙ではない」⁴⁷と記されたように、全体としては貧しい県であったといえる。清代には溺女（女の嬰兒を殺すこと）の習慣があったことが、県知事であった陳盛韶により記録されている⁴⁸。さらに清末にあつては租典妻（妻の質入れ）の習慣も残っていた。このことはアメリカの駐福州領事 Hixson により報告された⁴⁹。租典妻は一定期間他人の妻を借入しその間に生まれた子供を自分の子供とする慣習である。古田における反キリスト教暴動（古田教案）を分析した佐藤公彦は、当時貧しさのため妻帯できない男たちの問題を古田社会が抱えていたことを指摘しているが、こうした人々の存在は社会不安を生み出す要因となったであろう⁵⁰。さらに清末にはアヘンも相当蔓延していた。これについては宣教師による次の叙述が詳細である。

数年前にはほとんどケシの成長など見られなかった美しくまた豊かな閩江流域は、いまやケシの実で土地が覆われる季節となっている。その結果はすなわち、米や小麦や芋そして他の食物がケシの実に置き換えられているということである。ケシは単に人々を毒し駄目にしていただけでなく、土壌も駄目にしてしているのである。食料の不足は生活費の高騰を招いた。それで人々の不満があちこちで聞かれることとなった。そこでこれらの抑圧された人々による一斉蜂起の危険が存在するのである⁵¹。

以上見てきたように、清朝末期にあつて古田社会は多くの矛盾に直面していた。そしてこのような社会経済的特徴をもつ古田県は、メソジスト監督教会と英国聖公会による共同布教区となった。聖公会は 1863 年には県城に会堂を建設し、メソジスト監督教会も 1863 年から伝道を開始していた⁵²。しかし、布教過程において地元の民間信仰である齋教⁵³との

⁴⁶「此地は福州延平間に於ける第一の貨物取引場にして、福州とは小蒸気船の往来あり（中略）商業に於いて洋口と共に閩江流域に於ける重要な地なり、殊に此地は福州との直接貿易が行はるゝを以て土地は富み、生活程度も高く（仮名遣いは原資料のまま）」—東亜同文会編『支那省別全誌』第 14 卷 福建省、東京、東亜同文会、1920 年、107 頁。

⁴⁷清 曾光禧纂『古田県郷土志略』物産、1906 年。

⁴⁸清 陳盛韶『問俗録』卷二、古田県、北京、書目文献出版社、1983 年重印。

⁴⁹佐藤公彦『清末のキリスト教と国際関係』汲古書院、2010 年、第 3 章「1895 年の福建・古田教案」。なお同書において佐藤は James Courtney Hixson "Report of the United States Consulate on the Huashan-Kult'en Massacre" Despatches from U.S.Counsel in Foochow, 1844-1906, Roll 8. を引用している。

⁵⁰社会矛盾に対する分析や租典妻の慣習についての説明は前掲佐藤公彦（2010 年）第 3 章、特に 113 頁及び注 39 を参照されたい。また租典妻は柔石（松井博光訳）「奴隷となった母親」『中国現代文学選集 7 抗戦期文学集 1』、平凡社、1962 年、所収の題材となっている。

⁵¹Wolfe, John R. "Playing the devil's game in China". Letter... on the opium question. Dated Foochow, 18th Sept 1906. 東洋文庫蔵。

⁵²古田県基督教三自愛国運動委員会編『古田県基督教志』1989 年、第 1 章。

間に摩擦が発生し、その信徒による襲撃により宣教師が殺害されるに至った。これが 1895 年の古田教案である。

古田教案については、すでに中国においても謝必震などによる研究がある⁵⁴。また日本の佐藤公彦は、日清戦争中から戦後にかけての時期、清王朝崩壊の予感、官憲の弱体化、地域社会における秩序の揺らぎなどが社会不安を惹起し、民間宗教結社である齋会による宣教師襲撃に帰着したと分析している⁵⁵。また福建省における英国聖公会の活動を研究した張金紅は、古田教案発生の後、福清、莆田、仙游などの地区で深刻な「特教」（外国教会を後ろ盾と恃む）心理が発生し、短期間で大規模な信徒の増加があったことを明らかにした⁵⁶。一方、その反作用として社会の一部からの反キリスト教感情も増幅した。これについて朱峰は、百日維新の失敗後、キリスト教徒が処罰されるとの謠言が出回ったことを紹介している⁵⁷。また 1900 年の義和団事件時には、福州地区において教会と教民を攻撃するとの謠言（流言飛語）が発生し、緊張が高まった⁵⁸。さらにキリスト教徒が在地民間信仰への寄付を拒否したことから、地域社会との矛盾が高まったことや、これに関連して中国人牧師へ暴力が振るわれる事件が閩清県で発生したことがアメリカ領事の報告からも読み取れる⁵⁹。このように徐々に高まる社会的緊張がキリスト教徒による移民を後押ししたと考えられる。

他方で興化地方は沿海部に位置し、経済的には相対的に富裕であった。日本の台湾総督府の調査報告も、「興化地方の住民には海外移住をなし、理財の途に長じ、物質豊富なるにあらざるも比較的購買力に富む」とその経済状況を評価していた⁶⁰。しかし、興化では伝統的に「烏白旗」と呼ばれる地域社会内の党派闘争⁶¹や匪賊の活動が激しく、民国時期にあって治安は極度に悪化していた⁶²。さらに衛生条件も悪く、疫病が頻繁に発生していたのである⁶³。以下では興化地区におけるキリスト教徒と地域社会との矛盾及び移民の動機についての聴き取りを紹介する。

⁵³ 齋教については浅井紀「無生老母への誘い 齋教青蓮教一貫道」（野口鉄郎編『結社が描く中国近現代史』山川出版社、2005 年所収）を参照されたい。

⁵⁴ 謝必震「古田教案起因新探」『近代史研究』1998 年 1 期。劉国平『1895 年古田教案研究』福建師範大学博士学位論文、2006 年。

⁵⁵ 前掲、佐藤公彦（2010）第 3 章を参照されたい。

⁵⁶ 張金紅『胡約翰与福建安立甘会研究：1862－1915』福建師範大学博士学位論文、2007 年、133 頁。

⁵⁷ 前掲、朱峰（2009 年）、72 頁。

⁵⁸ 徐曉望主編『福建通史』近代、福州、福建人民出版社、2006 年、332 頁。

⁵⁹ Samuel L Gracy to the Department of State “Condition of Consular District during the Troubles in North China June” June 27th 1900. Despatches from U.S. Consul in Foochow, 1844-1906, No. 0481, Roll 9.

⁶⁰ 台湾総督府官房調査課『北部福建事情』1922 年、126 頁、東洋文庫蔵。

⁶¹ 「莆田の烏白旗械闘」莆田県志編輯委員会『莆田県志』1962 年、所収。

⁶² 「民国二十年前後莆田県土匪的分布情況」徐天胎『福建民国史稿』福州、福建人民出版社、2009 年、283 頁。

⁶³ 「時報—福建省莆田・仙游地方ペスト猖獗」『南支那及南洋情報』43 号、1933 年。

以前中国では病が多く、不衛生のために多くの人が若くして死にました。私の父は 6 歳で父母を失いました。伯父は長男で当時 15 歳ぐらいでした（中略）伯父はこのような状況の下で考えました。家で祀っている神は三食お供えしているにも拘わらず、どうして頼りにならないのだろうか。こうした疑問をもっているところにキリスト教の伝道があり、伯父は信徒になったのです。伯父は農民でしたが、宗教の関係で近隣とトラブルを起こしました。家屋や田地も失うことになったのです。親族や近隣の人々に追い出されたのです。伯父はまず都市に行った。礼拝堂に行き、その労働者になりました⁶⁴。

引き続き、以下では民国時期の治安の悪化が東南アジアへの移民を牽引し、その際に教会が避難民に移民のルートを提供していた事例を紹介したい。

（2）民国時期の治安の悪化

1913 年の第二革命後、福建は長きにわたり北京政府系の外来軍事政権の統治下に置かれた。安徽派の李厚基は 1914～22 年まで、直隸派の孫伝芳と周蔭人は 1923～26 年まで福建を支配した⁶⁵。この期間には軍閥混戦と匪賊の横行により治安状況が極めて悪化した。これについて、当時の日本の研究者長野朗は以下のように叙述していた。

福建は四川や湖南と同じやうに一時は南北の争奪地となつたため、戦争の絶え間が無く、双方で土匪を利用して味方とするため、土匪か軍隊か区別がつかず、土匪自身でも自治軍と名乗っていたために、軍隊か土匪か区別のつかない曖昧なのが少なくなつた。又土匪出身の軍人が多いことも四川等と同じで、大土匪団は常に軍閥の頭目と連絡して居る。土匪の遣り口も半官半匪であり、往来の要道に徴税局を設けて、上下の民船や往来の車馬行人から通行税を徴して、納めなければ掠奪するので皆納めた。或いは沿道を租税を徴して歩くのさへある。見た目も軍服を着て新式銃を持ち、土匪と軍隊の献血児見たやうなのが福建土匪の特色である（仮名遣いは原資料のまま）⁶⁶。

このように外来政権と匪賊による略奪が福建の民衆を苦しめるなかで、東南アジアへ活路を求める者が続出したのである。以下では当時の社会状況を語るシンガポールの廖清醒氏（1906 年福州生まれ、理髪師、19 歳でシンガポールへ渡航）による口述記録を引用する。

当時福建にはとても多くの匪賊がいました。匪賊といえば南方には陳国輝、北方には盧興邦がいました。これらの賊はとても野蛮でした。大きな村は彼らを接待しなけれ

⁶⁴何WH氏、1935 年生まれ、シブ興化莆仙公会役員、退職中学教師、2009 年 8 月 27 日訪問。

⁶⁵徐天胎編著『福建民国史稿』福州、福建人民出版社、2009 年、283 頁。

⁶⁶長野朗『支那兵・土匪・紅槍会』坂上書院、1938 年、275～276 頁、東洋文庫蔵。

ばならなかったのです。もし彼らの求める物を与えないと、様々な嫌がらせを受けました。それゆえ当時福州の民衆の生活は苦しかったのです。政府の統治といえば、当時は北方の人間、李という、李厚基によるものでした。彼は北方から来て福建の情勢にはあまり詳しくありませんでした。彼の兵隊は、見かけでは恰も頭の大きなベンガル兵のようでしたが、実際に戦わせると、戦えなかったのです。彼らは死を恐れました。彼らに田舎に行って任務を遂行しろと命令しても行くのを恐れました。それゆえ、田舎は無政府状態となったのです。匪賊がこのように政府に打撃を与えたのです。こういう状況でしたので民衆はみな苦しみました。金持ちが苦しまなかったという訳ではなく、金持ちも苦しんだのです。金持ちは誘拐されました。誘拐し身代金を要求されました。金がない者はというと、もっと苦しく、生きていく力がなかったのです⁶⁷。

こうした治安状況から逃れるために教会の関係を利用しシブへ渡航する者もいた。

私の父母も信徒になっていました。当時政府は強くなく、匪賊がとともたくさんいました。私の父と祖父は匪賊に誘拐されました。祖父が先に逃げましたが、怖くて家にいられないので親戚のところに寄寓しました。父も教会へ逃げ込みました。祖父はこのことを知って急いで父を南洋に送ったのです。当時、仙遊には匪賊がいるだけでなく、さらに政府軍がいました。聞くところによると、地元の人々は政府軍を匪賊より恐れていました。政府軍が来ると白昼からあれやこれや物を要求します。ひどい者は女の子まで連れて行きます。地元の人々はこれら兵隊を非常に恐れたので南洋に移民したのです。実際に多数の興化人が南洋に来たのは匪賊と北軍の迫害を恐れたからです。祖母が祖父の意を汲んで教会に手配してもらいました⁶⁸。

なお、日中戦争時期には徴兵を逃れての東南アジアへの脱出する者も多数存在した。徴兵から逃れるにあたってキリスト教会のネットワークが利用されたか否かは明らかではない。しかし戦時期の移民の背景を考察するに際して、徴兵逃れは重要な問題であるため、以下にその状況を紹介しておきたい。

(3) 国民党政府による徴兵を背景とする移民

日中戦争時期の8年間にあつて、国民政府は総数約53万人の兵士を福建省から徴兵した⁶⁹。しかしこれには多くの問題や困難が内在した。台北の中国国民党党史館所蔵の国防最高委員会檔案には「徴兵を開始して以来、成績は未だ彰かではない。これは固より国民教育が未だ普及していないためであり、人民に国家民族観念が欠乏しているためである。人民はあらゆる方法で兵役を避けることを図るだけで、力有る者は力を出すという責任を果

⁶⁷ Oral History Centre, Project title : Chinese Dialect Groupe Hokien, Accession No.000083, Mr.Liaw Ching Sing, National Archive of Singapore.

⁶⁸ 林 DL 氏、1936年生、シブ市興化芭、2011年11月25日訪問。

⁶⁹ 容鑑光「抗戦时期的兵役制度」『近代中国』（台湾）60期、1987年。

たしていない」⁷⁰との視察報告が保存されている。しかし民衆の立場に立てば戦時動員、特に徴兵は実に苛酷なものであった。台湾総督府官房調査課が編集した雑誌『南支南洋』は福建省での徴兵の実態を次のように報じている。

昨年徴兵制度実施の後是一般貪官汚吏が地方の土豪劣紳と結託して本制度を悪用し莫大な賄賂を搾取してゐる。即ち福建人民は概して戦争を憎悪し、「好漢不当兵」の古訓はなお大多数民家の脳裡に深く刻まれてゐる。故に有資産者は替え玉の壮丁を高価で買収し、一方当局者に贈賄して兵役の免除を企図する醜態が到る所に演ぜられ、同時に無産者は相踵いて逃亡し、当局はこれを追求逮捕するなど、各地方はこの徴兵に関する惨劇の繰り返しで人民は恐怖不安のどん底に押し込まれている。筆者は或る日閩北某県に於て全県官民各界が壮丁入営を歓迎する場面を目撃した。成程県城の市民は軍政当局の命令で戸毎に国旗を掲げ、爆竹を鳴放し如何にも熱烈なる情景を展開せるやうであるも、料らずも被徴送の入営壮丁は数珠繋ぎに藁の縄で縛られ、護送兵に引きずられ乍ら悲惨に哭いて居り、沿途追従する家族は或いは夫を叫び或いは子を悲しみ観る者をして酸鼻に堪えないものがある⁷¹。

このため、徴兵から逃れるために東南アジアへ脱出する者が続出した。例えばインドネシアの華人財閥サリム・グループの創始者として有名な Sudono Salim（林紹良）は 1916 年福建省福清県海口鎮に生まれ、1938 年に徴兵を逃れるため叔父を頼りインドネシアに渡ったとされる⁷²。シブで筆者が行なった調査でも類似した事例を聴き取ることができた。

Q:1940 年にどうしてこちらに来たのですか。

A:当時日本が侵入し、生活が困難になり逃げてきたのです。耕す土地も少なかったし、その他国民政府が徴兵を行ったからです。抗戦のために家に子供が 2 人いたら 1 人、3 人いたら 2 人を徴兵しました。

Q:兵隊となるのが怖くて逃げてきた人たちもいるのですか。

A:いますよ。とても多い⁷³。

このことは中国政府にとっては大きな問題であった。福建省政府が編纂した『福建兵役概況』（1939 年）においても「福建南部では少なからざる人が兵役を逃れるために匪賊の下に参加したり或いは東南アジアに脱出したりしている」との認識が示されていた⁷⁴。

ただし 1941 年 12 月に太平洋戦争が始まり日本軍が東南アジアを占領すると同方面への

⁷⁰「監察院第一巡察団福建省巡察報告」1943 年 7 月、台北、中国国民党党史館、国防档案、防 003/1089（国防最高委員会）。

⁷¹林阿仁「福建の過去と将来」（『南支南洋』1939 年 4 月号）。『南支南洋』は台湾総督府官房調査課が編集した雑誌である。国会図書館蔵。

⁷²「世界巨富林紹良」<http://www.millionbook.net/js/y/yanxuzhi/sjfh/053.htm>
2013 年 5 月 20 日最終確認。

⁷³陳 WD 氏、1920 年生まれ、自転車商人、祖籍莆田市江口鎮、2011 年 11 月 23 日訪問、訪問地点シブ莆田公会。

⁷⁴福建省政府編『福建兵役概況』、1939 年、1 - 2 頁。

逃避は不可能となり、また国民政府も渡航の禁止を命令した⁷⁵。その後、第二次大戦が終結し国共内戦が勃発すると徴兵逃れの渡航も再開された。例えばシブでの事業に成功した范培堯という人物は、1947年1月に壮丁として県の徴兵処に送られたが、3月に母親が金を工面し買い戻してくれた。このままでは生きてはいけないと深く感じ、母の命に従い母方の親戚を頼ってシブに移民したという⁷⁶。

(4) 経済発展、社会上昇を目的とした移民

ここまではキリスト教徒への迫害や劣悪な治安状況から逃れるという動機からの移民を検討してきた。しかし経済発展や社会上昇を目的とし移民した人々も多く存在した。以下では古田県D鎮HY村の事例を紹介する。古田県D鎮は新編の県志においても重要な僑郷として紹介されている⁷⁷。なかでも同村は、現在村民の半数以上がキリスト教徒となっているだけでなく、シブへの移民で著名な成功者を出している村である。HY村は福州から福建北部へ抜ける幹線上に位置し、経済状況が比較的良好であっただけでなく、清末においては貢生、挙人、生員を十数人輩出するなど文化水準も高かった。科举制度の廃止後は旧来の学田を財源とし、小学校を創立した。HY村の小学校を卒業した者が県城にあった超古中学などの教会学校に進学したことにより、キリスト教の影響力が強まったという。HY村の主要な宗族であるC姓の族譜はキリスト教の受容について「清末民国初期に学校に進学する者は雨後の筍のようであった。当時古田の二箇所の中学は米英両国が創建したものであり、キリスト教の教義もHY村の大部分の人の受け入れるところとなり、西方の先進思想もHY村に入ってきた」と、その積極的側面を強調している。同村からシブへの初期移民には貧困者が多かったが、その後は新たな発展の機会を求めシブへ赴く者が現れた。例えば、CZ T氏はシブへ教師として招聘され、後に華僑送金業務に従事した。その子息CL X氏は古田の超古中学で教育を受け、国民党政府の軍人となった後、1937年以降はシブへ戻り、銀行業などで成功し、シブ中華総会の会長やシブ古田公会の会長を務めるに至った。このようにHY村の人々はキリスト教を受容すると同時に、経済発展・社会上昇を図るために積極的に詩巫へ移民していったのである⁷⁸。

ここで付言すると民国末までに古田県では、英国聖公会は教会46ヶ所、伝道所6ヶ所を設立、信徒数は2,521人となり、メソジスト監督教会は教会69ヶ所、伝道所6ヶ所を設立、信徒数は1,145人となった。教会は私立史犛伯初級中学、私立精英女子中学（以上聖公会による）、私立超古中学や毓馨女子中学、懐礼医院（以上メソジスト監督教会）を創建するに加えて、衛生運動、アヘンの撲滅、纏足解除運動などの風俗の改良に尽力している⁷⁹。なお懐礼医院は古田唯一の近代的病院であり、信徒のみならず県商会主席など地域

⁷⁵ 吳同永「福州地区華僑出国史略」福州市華僑出国歴史学会編『福州地区 華僑出国史論文集』福州市華僑歴史学会、1994年、151頁。

⁷⁶ 范培堯『馬来西亜・砂拉越・詩巫 范培堯南遷史』2000年、47頁。

⁷⁷ 古田県地方志編纂委員会『古田県志』中華書局、1997年、第25編 華僑。

⁷⁸ 陳XQ氏、1936年生まれ、退職教師、HY村人、2010年8月14日、古田県城での聞き取り。『古田県D鎮HY村C氏家譜』2009年、B12-13、B18頁。編者未記載『砂羅越古田公会双慶特刊1928至1988』1988年、80頁。

⁷⁹ 前掲『古田県基督教志』第1章。

の紳士もその重要性を認識していた。メソジスト監督教会のニューヨーク本部には、古田の信徒や紳士が連名で医院への援助を継続することを請願した文書が送られている⁸⁰。民国時期の不安定な治安状況の下で、教会の会堂が匪賊に襲撃されたり、宣教師が営利誘拐されたりするなど困難も多々発生したが⁸¹、これにも拘わらず伝道は粘り強く継続された。日中戦争時期においても教会の勢力は強く、1938年に古田社会を描写した文章は「数十年来、欧米の宣教師は古田の面倒をよくみた。これにより現在にいたるまで古田の教会勢力は地域に深く根をおろしている」⁸²と評価している。

おわりに

清末から民国初期、元来外来の宗教団体であったキリスト教会は、福音を伝道するだけでなく、教育や医療を中心とする様々な社会事業を通じて、徐々に福州や興化地域社会への影響力を拡大しつつあった。このことは福建省の事情を注視していた日本の調査報告からも窺い知ることができた。

清末段階における福州・興化地区からの東南アジアへ人々が移民したことの背景には、貧困などの経済的事項のみならず、日清戦争、変法の失敗、義和団事件などによる清朝の統治の動揺と社会不安の醸成、さらにキリスト教徒と在地社会との摩擦などの複合的な要因が存在した。なお、キリスト教徒によるシブやシティアワンへの移民の成功には外国人宣教師とともに、中国人信徒や中国人牧師の貢献が看過できない。これは教会の中国化（本色化）及びキリスト教を受容した新式の中国人エリートの成長として理解すべき事項であろう。また辛亥革命後の福建省では、北京政府系の外来権力による統治が長期に亘り、外省軍隊による労働力の徴発、あるいは匪賊による誘拐が民衆生活を脅かした。民国時期の治安の悪化は東南アジアへの移民を一層促進したが、こうした事態に対応してキリスト教会は人々に避難のルートを提供し、その生存を保護した。これとは別に、古田県の事例に見たように、中等、高等教育機関や海外との関係などの「資源」を有する教会は人々にとって新たな社会的上昇の手段としても重要な機能を果たしつつあった。

このようにキリスト教の受容と東南アジアへの移民は、清末から民国にかけての過酷な生存環境に直面した福建民衆にとって有効な生存戦略であった。同時に海外との繋がりや深まりと人の移動とは、地域を外に向けて開くものであり、社会・文化に新たな要素を導入するという積極的な役割を果たしていたと評価できよう。

⁸⁰古田県の信徒、紳士からニューヨークの Board of Foreign Mission への請願書、July 30,1935.Methodist Episcopal Church, 1912-1949 China, Japan,and Korea. Roll 18,pp.0920-1083.

⁸¹教会への襲撃については 陳興善「古東苦境」『中華聖公会福建教区月刊』1巻1期、1935年1月による。古田県で発生した聖公会宣教師の誘拐事件についてはメソジスト教会古田教区の W.S.Bissonette からニューヨークの Board of Foreign Mission 本部への書簡に記述されている。Methodist Episcopal Church, 1912-1949 China, Japan,and Korea.Roll 18,p.0920.

⁸²蒼生「古田剪影」『戦友』1938年3月、全国図書館文献縮微複製中心『民国珍稀短刊断刊福建卷』18巻所収。